

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について*

日本学術振興会特別研究員 / 東京国際大学

外崎淑子 / 藤巻一真

Psych Predicates and Causative Constructions: Theta Roles and Syntactic Structures

JSPS Research Fellow / Tokyo International University

Sumiko Tonosaki / Kazuma Fujimaki

In this paper, we address the question of how theta roles are projected in psych-predicate constructions by reexamining some of the data and their analyses proposed in the literature. We support the view that an Experiencer Object (EO) psych predicate is derived from the corresponding Experiencer Subject (ES) psych predicate. We also discuss the relation between the purported peculiar properties and the stativity of psych predicates, which has played an important role in EO psych predicates in Arad 1999, and Pylkkänen 1999. Taking causative constructions into consideration, we divide the Japanese causative head into two types: one which takes an eventive *vP*, and the other a stative *vP*. We suggest that this division coupled with movement into a theta position can account for the facts with respect to binding and scope interpretation of both psych predicates and causative constructions.

*心理述語 *使役 *little *v* *状態性 *経験者

0. はじめに

心理述語には、(1a)(2a)のように経験者が主語に現れる「経験者主語心理述語 (Experiencer Subject Psych Predicates: ES心理述語)」と、(1b)(2b)のように経験者が目的語に現れる「経験者目的語心理述語 (Experiencer Object Psych Predicates: EO心理述語)」があることがよく知られている。

言語科学研究第7号(2001年)

- (1) a. John fears ghosts. (ES心理述語)
 b. Ghosts frighten John. (EO心理述語)
- (2) a. 太郎がその事件を恐がった/喜んだ/悲しんだ。(ES心理述語)
 b. その事件が太郎を恐がらせた/喜ばせた/悲しませた。(EO心理述語)

本稿では、日本語の心理述語の意味役割がどのように統語構造に投射されるのかを、先行研究とデータの検討によって考察し、EO心理述語はES心理述語からの派生であるとする分析を支持する。また、日本語のEO心理述語の特徴は使役形態素「させ」に起因することを明らかにし、他言語の心理述語構造を考える上での一助とする。

1節では、心理述語の主な先行研究、すなわち、EO心理述語はES心理述語からの派生であるとするBelletti and Rizzi (1988)、両者は派生関係にないとするArad (1999)、状態述語に関しては両者は派生関係にあるが、非状態述語では両者は派生関係にはないとするPylkkänen (1999)の分析を考察する。そして、彼らの分析の利点と問題点を明らかにし、日本語の心理述語分析への足がかりとする。2節では日本語のAkatsuka (1977)のデータを検討することにより、EO心理述語はAkatsuka (1977)の主張とは異なりES心理述語からの派生であるということを提案する。3節では、日本語においてEO心理述語と同様の振る舞いをする使役「させ」構文についてその特徴を考察し、日本語の使役「させ」構文は、(i)補部に出来事の動詞句(event vP)を取るものと、(ii)外項に原因(Causer)を取り、補部に人に関する状態性動詞句(stative vP)を取るものの2種類に分けられることを示す。4節では、これらのデータ観察を説明するための構造を提案し、「させ」の外項であるCauserが補文内の項(Cause/Target/Subject Matter)とどのように同定されるのか、 θ 位置から θ 位置への移動の可能性について示唆する。

1. 心理述語分析再考

この節では心理述語に関する3つの先行研究を再検討し、それぞれの利点と問題点を明らかにし、次節からの日本語分析の足がかりとする。

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

1.1. Belletti and Rizzi 1988：ES/EO心理述語は派生関係にある

(3a)はイタリア語のES心理述語文、(3b)はEO心理述語文である。Belletti and Rizzi (1988)は(3a, b)ともにGianniは経験者(Experiencer)、questoは対象(Theme)であると考えている。

(3) a. Gianni teme questo.

Gianni fears this

b. Questo preoccupa Gianni.

this worries Gianni

(Belletti and Rizzi 1988: 291)

ES心理述語とEO心理述語が同じく経験者と対象の2つの項を持ち、その上で、「同一の意味役割を担う項はD-構造のレベルにおいて同一の統語構造を持つ」というUTAH (4)が正しいとすれば、表層の位置関係とは異なり、ES心理述語とEO心理述語は同じ統語基底構造を持つということになる。

(4) Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH)

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-Structure. (Baker 1988:46)

Belletti and Rizziはこの立場を取っており、彼らは次の連結原理(Linking Principle)を経験者動詞に仮定している。

(5) Linking Principle for Experiencer Verbs

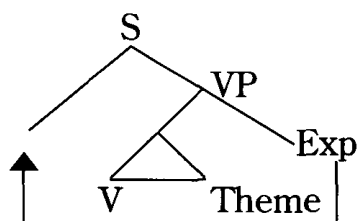
Given a θ -grid [Experiencer, Theme], the Experiencer is projected to a higher position than the Theme. (Belletti and Rizzi 1988: 344)

彼らの分析によると、ES心理述語とEO心理述語は同じ関与者(participants)を持ち、両者はD-構造においては同じ写像関係にある。ただS-構造での移動の違いのみが、両者の違いであるということである。その証拠としてEO心理述語である(3b)

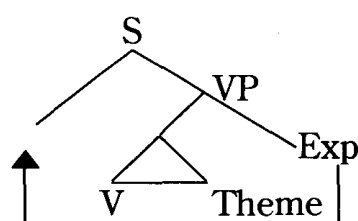
言語科学研究第7号(2001年)

のような *preoccupare* 文は、(a) 照応接語化 (anaphoric cliticization) ができない (b) *pro arb* の解釈がない (c) 使役構文に埋め込めない (d) 受身構文にできないという特徴を持つことが挙げられている。これらはすべて派生主語を持つ構文の特徴であることから、彼らはEO心理述語構文はES心理述語構文からの派生であり、対象の項が非 θ 位置である主語位置へ移動した結果の、ある種、非対格構文のようなものであると考え¹、概略、(6a, b)の構造を仮定している。

(6) a. ES心理述語文



b. EO心理述語文



(6b)の構造は、EO心理述語文が(7a)のような逆向束縛 (backward binding) を許すことをも説明するとしている。

(7) a. I propri_i sostenitori preoccupano Gianni_i. (EO心理述語)

'His own supporters worry Gianni.'

b. *I propri_i sostenitori temono Gianni_i. (ES心理述語)

'His own supporters fear Gianni.'

(Belletti and Rizzi 1988: 321)

EO心理述語文は、イタリア語のみならず、英語、日本語等でも逆行束縛を許ことはよく知られている (Akatsuka 1977等)。

(8) a. Pictures of himself_i pleased John_i.

b. 自分_iの母親の話が花子_iを喜ばせた。

EO心理述語文はES心理述語文からの派生であるとする分析は、細かいシステムの違いは別として、他にKuroda (1965), Fujimaki (1998)等の日本語の分析がある。このタイプの分析ではEO心理述語は意味役割と統語構造関係の例外ではなく、対

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

象は動詞の内項、経験者は動詞の外項として基底生成すると捉えることができるという利点がある。

1.2. Arad 1999: ES/EO心理述語は派生関係にない

Arad (1999)は、Belletti and Rizzi (1988)のイタリア語の分析を、状態性(stativity)の視点から検討し直し、EO心理述語文はES心理述語文からの派生ではないと分析している。

Aradは、Belletti and Rizziがイタリア語のEO心理述語の特徴であるとした「照応接語化ができない」「使役構文に埋め込めない」という事実と、彼女自身の観察である「目的語からの抜き出しができない」という事実は、EO心理述語が状態の解釈(stative reading)を持つ時のみ成り立つ一般化であると記述している。(9)に照応接語化、(10)に使役構文への埋め込みの例を挙げる。

- (9) a. ??Gianni si spaventa. (stative reading)
 Gianni self frightens.
- b. Gli studenti si spaventano prima degle esami per indursi a studiare di piu.
 the students self frighten before the exams to urge-refl to study more
 ‘The students frighten themselves before exams in order to urge themselves to study harder.’ (agentive reading) (Arad 1999: 7)
- (10)a. *Gianni/questo gli ha fatto preoccupare Maria. (stative reading)
 G. this him-Dat made worry M.
 ‘This/Gianni made him frighten Maria.’
- b. Gianni gli ha fatto spaventare Maria per farla lavorare de piu. (agentive reading)
 G. him-Dat made frighten M. to make her work more
 ‘Gianni made him frighten Maria to make her work harder.’ (Arad 1999: 7)

以上のことからAradは、(9a)(10a)が非文なのはEO心理述語ゆえの特徴ではなく、状態性の解釈ゆえであると考え、little vの性質に着目し、little vには一般的な他動詞文を作るagentive little vの他に、状態性他動詞文を作るstative little vがある

言語科学研究第7号(2001年)

と仮定した。

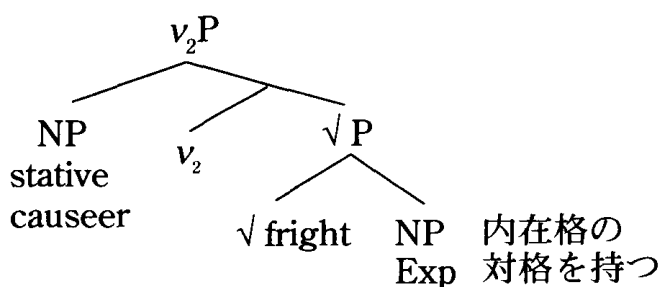
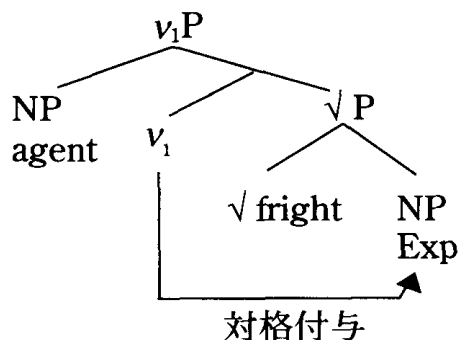
Aradはlittle *v*の違いによってEO心理述語の状態解釈と他動解釈の性質の違いを説明している。agentive little *v*は、外項に動作主を取り、目的語に対格を構造格として与えるが、stative little *v*は、外項に状態性原因 (stative causer)を取り、目的語には内在格 (inherent case)を持った項を取るとし、(11)の例に、(12a)(12b)の構造を仮定している。²

(11) Gianni/Questo spaventa Maria.

‘Gianni/this frightens Maria.’

(12)a. 他動性解釈の場合

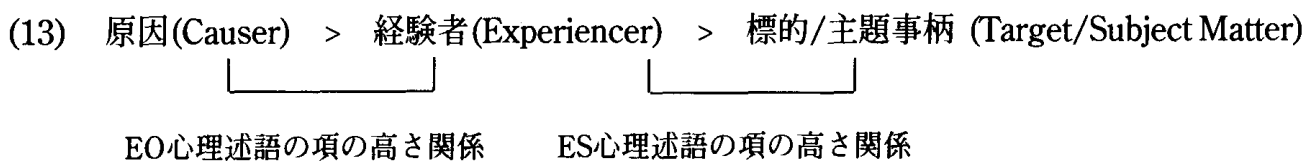
b. 状態性解釈の場合



(12a)の構造は、いわゆる他動詞の構造と同一である。このような構造を仮定することによって、Aradは状態性による特徴の違いを説明している。

ES心理述語とEO心理述語の違いについては、Aradは(13)に挙げたPesetsky (1995)の意味役割階層を踏襲し、ES心理述語とEO心理述語ではそのθ格子が異なるため、(4)のUTAHからいっても両者は同じ基底構造を持つ必要がないとしている。またES心理述語の構造は、英語やイタリア語の場合、その高さ関係から(14)のような標準的他動詞構文であるとし、EO心理述語の構造(12)と区別している。

Pesetskyの意味役割階層



言語科学研究第7号(2001年)

- (16) 誰かがどの人をもその工場で働かせた。 誰か>どの / *どの>誰か
 (17) 誰かがどの本にも驚いた。 誰か>どの / *どの>誰か
 (18) 何かがどの人をも喜ばせた。 何か>どの / どの>何か

AradがEO心理述語に与えた構造の(12b)、つまり、原因(Causer)の項と経験者の項との高さ関係が一義的にしか決まらない構造では、日本語の(18)の作用域解釈のデータは説明できないこととなる。これは、Aradの(12a, b)の構造は、少なくとも日本語の心理述語構造としては適切ではないことを示している。Aradの分析では心理述語に状態性の要素を持ち込むことはできる。しかし逆行束縛を統語現象として扱わないとしても、EO心理述語の場合にのみ経験者を語幹の内項として基底生成させるということは、近年Hale and Keyser (1993)等が捉えようとしている意味役割と統語構造の関係は保持しなくなるということである。

Aradが捉えようとしたイタリア語における他動性/状態性解釈によるEO心理述語の振る舞いの違いは、日本語の場合には、逆行束縛の可否、作用域解釈の違いとして現れる。Akatsuka (1977)は、EO心理述語が他動性解釈を持つ場合には(19a)のように逆行束縛を許さないと観察している。また、Fujimaki (2000)の作用域解釈においても、EO心理述語が他動性解釈を持つ場合には、(19b)のように解釈は一義的に決定する。

- (19a). *自分₁の秀才ぶりを妬んでいる重役が佐藤課長₁をわざと困らせた。
 (Akatsuka: 68)
 b. 誰かが無理矢理どの人をも喜ばせた。 誰か>どの / *どの>誰か

(19a, b)は、状態性の解釈であるEO心理述語の(8b)、(18)との対比をなす。すなわち、日本語のEO心理述語においても、イタリア語とは表出形式は異なるが、状態性の違いが統語的振る舞いの違いとして現れるということである。

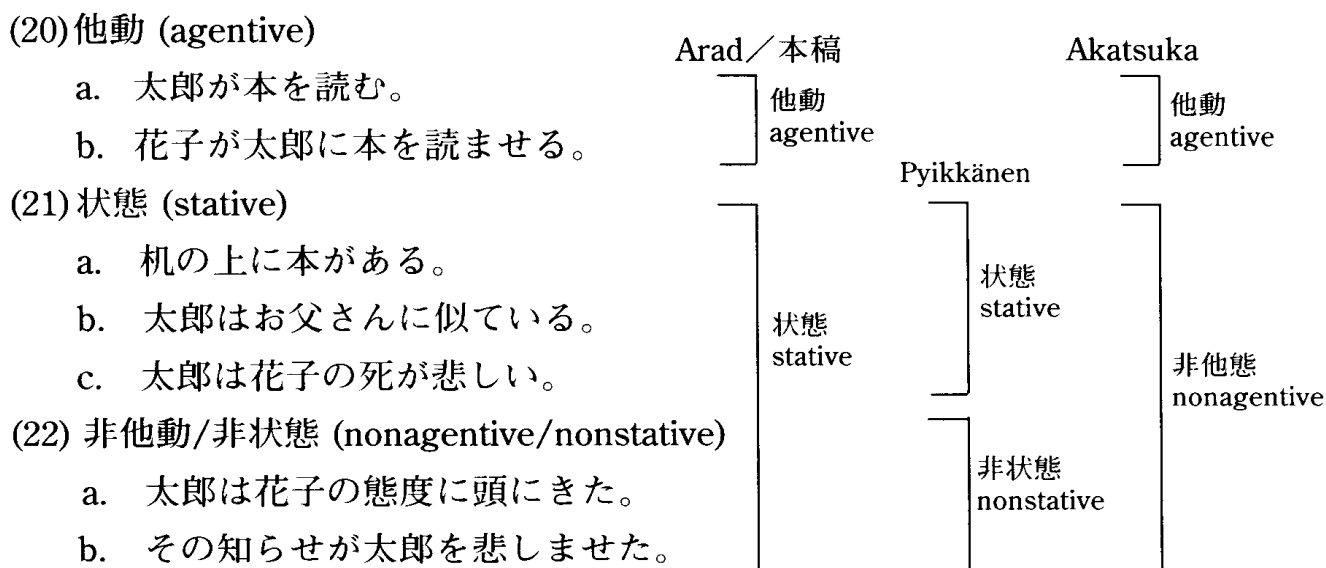
では、Aradが挑戦したように状態性の違いを統語構造に反映させ、かつ、逆行束縛と作用域解釈の事実が説明可能な構造、意味役割と統語構造の関係を保持させる構造を日本語のEO心理述語に仮定することは可能だろうか。1.4ではPylkkänen (1999)のフィンランド語の分析を検討し、意味役割と統語構造の関係の

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

保持と、状態性の違いの両者を説明できる分析への足がかりとするが、その前に、本稿のキーワードである「状態性」について整理しておく。

1.3. 状態性

述語の状態性、他動性に関しては、研究者によって線引きが異なるが、概ね、外項に動作主を取る(20)のような述語構文が他動 (agentive)であり、(21)のような述語構文が状態 (stative)であることは一致している。(21)の状態の文とは、日本語においては金田一 (1950)の四分類の「状態述語」と「第4種」に相当し、英語においては、Vendler (1967)の4分類の状態 (State) に相当するものである。問題は、(22)のような動詞である。外項に動作主を取らず経験者や原因を取り他動性が低いという点で、非他動ではあるが、(21)の純正な状態と比べると、「ている」形になることや、対格目的語が取れるという点で、非状态的である。Aradは状態/他動の線引きを(20)と(21)(22)の間に取り、前者を他動、後者をまとめて状態としたが、Pykkänenは(20)は考察に入れず、(21)と(22)の間に状態性の線引きをし、(21)を状態、(22)を非状態としている。後のAkatsuka (1977)では、使役構文の違いとして (20b)を他動性使役とし(22b)を非他動性使役としている。



本稿では Arad, Akatsuka 同様、(20)と(21)(22)の間に線引きをし、その(20)を他動、(21)(22)を状態として扱うこととする。

言語科学研究第7号(2001年)

1.4. Pylkkänen 1999: 状態述語は派生関係にあり、非状態述語は派生関係にない

Pylkkänen (1999)は、フィンランド語の心理述語には状態述語と非状態述語があること、また、EO心理述語は日本語同様ES心理述語に使役の形態素 *-tta-* をつけることによって語彙的に派生することを記述している。以下に状態述語と非状態述語の例を、(23a)(24a)にES心理述語、(23b)(24b)にEO心理述語として挙げる。状態述語の場合は、ES/EO心理述語ともに目的語の格は部分格 (partitive)のみであるが、非状態述語の場合は、ES心理述語の目的語の格は出格 (elative)、EO心理述語の目的語の格は対格 (accusative)と部分格が許される。

状態述語

- (23)a. Mikko inhoa hyttysi-a.
 Mikko-NOM find-disgusting-3SG. mosquitos-Par
 ‘Mikko finds mosquitos disgusting.’
- b. Hyttyset inho -tta- vat Mikko-a.
 mosquitos-NOM find-disgusting -CAUS-3PL Mikko-Par
 ‘Mosquitos disgust Mikko.’ (Pylkkänen 1999 (1))

非状態述語

- (24)a. Mikko viha-stu-i uutisi-sta.
 Mikko-NOM anger-INCHOATIVE-3SG.Past News-Ela
 ‘Mikko became angry because of the news.’
- b. Uutiset viha-stu-tti-vat Mikko-a
 news-NOM anger-INCHOATIVE-CAUS.PAST-3PL. Mikko-Par
 ‘The news made Mikko become angry.’ (Pylkkänen 1999 (2))

Pylkkänenはそれぞれの述語の例と格関係をTable-1のようにまとめている。(I)のES心理状態述語に使役の形態素 *-tta-* がついたものが、(II)のEO心理状態述語である。(III)のES心理非状態述語は、名詞と動詞 *stu* ‘become’ が結合してできた複合述語であり、そこに使役の形態素 *-tta-* がついたものが、(IV)のEO心理非状態述語である。

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

Table 1 (Pylkkänen 1999: 3 (訳：筆者))

	ES心理述語	EO心理述語
状態述語 対応する 英語のクラス	(I)主語-Nom, 目的語-Par <i>inhoa</i> 'find disgusting' <i>saali</i> 'pity' <i>sure</i> 'be sad' fear, love, hate	(II)主語-Nom, 目的語-Par <i>inho-tta</i> 'disgust' <i>saali-tta</i> 'cause to pity' <i>sure-tta</i> 'cause to be sad' <i>concern, perplex, bother</i>
非状態述語 対応する 英語のクラス	(III)主語-Nom, 目的語-Ela <i>raivo-stu</i> 'become furious' <i>kauhi-stu</i> 'become terrified' <i>viha-stu</i> 'become angry' —	(IV)主語-Nom, 目的語-Acc/Par <i>raivo-stu-tta</i> 'cause to become furious' <i>kauhi-stu-tta</i> 'cause to become terrified' <i>viha-stu-tta</i> 'cause to become angry' <i>frighten, surprise, amuse</i>

Pylkkänenは状態述語と非状態述語を分けるテストとして、(a) 目的語に対格を取れるか (b) 進行形にできるか (c) 現在形で習慣の動作の解釈が取れるかどうか、を用いている。また、受身形にできるか否かと選択制限の問題を根拠に、状態心理述語の場合はES心理述語とEO心理述語は派生関係にあるが、非状態心理述語の場合は両者は派生関係にないとしている。しかし受身形のテストは派生主語の有無だけではなくその述語の状態性そのものに負うことがあるので、ここでは検討せず、選択制限についてのみ検討する。

Pylkkänenは、フィンランド語の状態心理述語ではES心理述語の目的語とEO心理述語の主語に同じ選択制限がかかるという事実を観察している。ES心理述語の中には*saali* 'pity'のように、目的語として有生名詞を取らなければならない(25a)、「そのニュース」のように、無生名詞を目的語に取れないもの(25b)があるとしている。この述語の場合使役化してEO心理述語としても、(26)に見るように、その主語には無生名詞が取れず有生名詞を取らなければならないという選択制限がかかる。³

言語科学研究第7号(2001年)

状態述語の場合

- (25)a. Minna saali Matti-a. (ES心理述語)
 Minna-NOM pity-3SG. Matti-PAR
 ‘Minna pities Matti.’
- b. ??Minna saali uutisi-a.
 Minna-NOM pity-3SG. news-PAR
 ‘Minna pities the news.’ (Pylkkänen 1999 (38))
- (26) ??Uutiset saali-tt-i-vat Minna-a. (EO心理述語)
 news-NOM pity-Cause-PAST-3PL Minna-PAR
 ‘The news caused pity in Minna.’ (Pylkkänen 1999 (39))

Pylkkänenは、ES心理述語の目的語とそれに対応する使役形、つまり、EO心理述語の主語に同じ選択制限がかかっているのです、両者は派生関係にあるとしている。

一方、非状態心理述語の場合、ES心理述語の目的語にかかる選択制限は、それに対応する使役形、つまり、EO心理述語の主語に、同じようには要求されない。(27)のように、非状態述語のES述語 *viha-stu* ‘become angry’は、目的語に有生名詞を取れないが⁴、それに対応する使役形、つまり、EO心理述語となると、(28)のように、その主語として有生名詞が許される。

非状態述語の場合

- (27) ??Maija viha-stu-i Jussi-sta. (ES心理述語)
 Maija-NOM anger-INCHOATIVE-PAST Jussi-ELA
 ‘Maija became angry because of Jussi.’ (Pylkkänen 1999 (42a))
- (28) Jussi viha-stu-tti Maija-n. (EO心理述語)
 Jussi-NOM anger-INCH-CAUS.PAST Maija-ACC
 ‘Jussi caused Mari to become angry.’ (Pylkkänen 1999 (43a))

従って、(28)のEO心理述語構文は、(27)のES心理述語からの派生ではないということになる。(同様の議論がAkatsuka (1977)の日本語分析にあり、次節で検討する。)

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

この選択制限の違いから、Pylkkänenは、状態心理述語に関しては、Beletti and Rizzi (1977)のようにES心理述語とEO心理述語は派生関係にあるとし、非状態心理述語に関しては、Arad (1999)のように両者は派生関係にないとしている。

では、Pylkkänenのデータは、非状態心理述語において、本当にES心理述語の目的語とEO心理述語の主語の間に同一の選択制限が掛かっていないということを示しているのでしょうか。次節では同様の観察を日本語にしているAkatsuka (1977)の分析を検討し、実はPylkkänenのいうフィンランド語の非状態心理述語においても同様の選択制限が掛かっているということを示唆する。

2. Akatsuka 1977

Pylkkänenの状態性の分類表Table-1に対応する日本語の例を考える。(I)に対応する日本語は心理形容詞の「悲しい」「恐い」などであろうが、(II)に対応する心理述語が見あたらないので、(I)と(II)に関する選択制限は日本語ではテストができない。一方、(III)と(IV)に対応する日本語は、(III)がES心理動詞、(IV)がEO心理動詞であろうことから、これらの選択制限について考察したAkatsuka (1977)を本稿で検討し直すこととする。

Akatsuka (1977)は、日本語のES心理述語は目的語に有生名詞を取れないが、EO心理述語はその主語に有生名詞を取れることから、EO心理述語はES心理述語からの派生ではないとしている。⁵

	ES心理述語	EO心理述語
(29)a.	*太郎が花子を悲しんだ。	花子が太郎を悲しませた。
b.	太郎が{花子のこと/花子の死}を悲しんだ。	{花子のこと/花子の死}が太郎を悲しませた。
(30)a.	*太郎が花子を喜んだ。	花子が太郎を喜ばせた。
b.	太郎が花子のことを喜んだ。	花子のが太郎を喜ばせた。

この日本語の観察はPylkkänenがフィンランド語に観察した事象と共通する。しかし、(29)(30)の各データは、本当に、EO心理述語の主語にES心理述語の目的語と同じ選択制限が働かないことを示しているのだろうか。Akatsukaは、Lee (1971)の観察として、(31)の例を挙げ、(31)は“painting”そのものがMaryをびっくり仰天させたという解釈ではなく、“something about the painting”がMaryを驚かせた

言語科学研究第7号(2001年)

という解釈の方が成り立つとし、これを“partial nature of the subject”として、EO心理述語の特徴の一つとして挙げている。

(31) The painting flabbergasted Mary. (Akatsuka 1977: 246)

Akatsukaは、日本語のEO心理述語にもこのような特徴が認められるとしている。例えば(29a)の「花子が太郎を悲しませた。」は、「花子」そのものが太郎を悲しませたのではなく、花子の行動、花子に関する何か、が太郎を悲しませたという解釈になる。つまりEO心理述語の主語には、「『人』そのものではなく『人』に関する何か、感情の原因となる事柄」が要求されるということである。金(1994)は形式名詞「こと」の出現は動詞の意味概念が深く関わっているとし、目的語に「対象」そのものではなく、「対象の命題内容」を求める動詞は形式名詞「こと」を用いるとしている。この金の用語を借用すれば、ES心理述語の目的語とEO心理述語の主語には、どちらも、「対象」そのものではなく、「対象の命題内容」という項が要求されるということである。ということは、(29)(30)のデータは、一見、ES心理述語の目的語とEO心理述語の主語には同じ選択制限が掛かっていないように見えるが、その名詞の意味解釈を考えるならば、どちらも「対象の命題内容」を選択していることから、両者には同じ選択制限がかかっていると言えるのではないか。両者に同じ選択制限が掛かっているとすれば、日本語のEO心理述語はES心理述語からの派生と考えることができ、Akatsukaの主張とは異なることとなる。

ここで、なぜ有生名詞(例(29)の「花子」)がES心理述語の目的語に入った場合は、そのままでは「花子に関すること」という解釈が得られず、必ず「花子のこと」としなければならないのに対し、有生名詞がEO心理述語の主語に入った場合には「こと」をつけることなく、「花子」のままで「花子に関すること」という解釈が得られるのかという疑問が残る。つまり、主語に「対象の命題内容」が求められた場合は、目的語とは異なり、有生名詞が形式名詞の補助なしに「対象の命題内容」という解釈が得られるのはなぜか、ということである。これは今後の課題とし、ここでは「ES心理述語の目的語とEO心理述語の主語には同じ意味解釈を受ける項が要求される」という選択制限が掛かるということに止める。⁶

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

もう一つ、ES心理述語の目的語とEO心理述語の主語に共通する意味制約を挙げる。Akatsukaは、もう一つの重要なLeeの観察を応用し、EO心理述語の目的語である経験者は主語で表される事柄を知覚(perceive)していなければならない(Akatsuka 1977: 110-111)との意味的制約を挙げている。AkatsukaはES心理述語については明記していないが、同様のことがES心理述語にも言える。ES心理述語の主語である経験者は目的語で表される事柄を知覚していなければならない。

知覚 ↓

- | | | |
|--------|--------------------------|--------|
| (32)a. | [母がガンで亡くなったこと]が宏を喜ばせた。 | EO心理述語 |
| b. | 宏は[母がガンで亡くなったこと]を喜んだ。 | ES心理述語 |
| c. | 宏は母がガンで亡くなったことを知って喜んだ。 | |
| d. | 宏は母がガンで亡くなったことを聞いて喜んだ。 | |
| e. | *宏は母がガンで亡くなったことを想像して喜んだ。 | |
| f. | *宏は母がガンで亡くなったことを否定して喜んだ。 | |

((32a-f)は Akatsuka 1977: 111-112)

(32a, b)の言い換えとして成り立つのは、(32c, d)であり(32e, f)ではない。これらは、経験者「宏」が目的語に現れる場合(32a)も、主語に現れる場合(32b)も、ともに、「母がガンで亡くなったこと」を知っていなければならないという意味制約である。この意味制約も、EO心理述語がES心理述語からの派生であると考えられる一つの根拠である。

このような経験者の知覚という意味制約がフィンランド語にもあるかどうかは確認はできないが、上述の有生名詞の選択制限の共通性から、日本語のみならずフィンランド語においてもES心理述語とEO心理述語は派生関係にあると言えるのではないか。

次節では、日本語において心理述語でないにも関わらず、EO心理述語と同じような振る舞いをする使役構文があることを観察し、ES心理述語をEO心理述語へと派生させる使役形態素の性質についてより詳細に考察する。

言語科学研究第7号(2001年)

3. 日本語の使役形態素「させ」

EO心理述語に用いられる使役形態素「させ」は、いわゆる統語的使役文と呼ばれる(33a, b)のような他動性使役文にも用いられる。

- (33)a. 社長が社員{を/に}その工場で働かせた。 (他動性使役文)
 b. 太郎が花子に本を読ませた。

この節では(33a, b)のような他動性使役文と、(34)のような状態性解釈のEO心理述語文、さらに(35a, b)のように、心理述語は内包しないが「気がせいである行動をとらざるを得ない状態に追い込まれる」という解釈の、状態性使役文である構文の3つについて検討する。

- (34) その話が花子{を/*に}喜ばせた。 (EO心理述語文)
 (35)a. 父親危篤の知らせが太郎{を/*に}病院へ走らせた。 (状態性使役文)
 b. 会社倒産の危機が太郎{を/*に}夜遅くまで働かせた。

Akatsuka (1977)が観察しているように、(33)の他動性使役文は逆行束縛を許さないが、(34)の状態性解釈のEO心理述語文と(35a, b)の状態使役文は逆行束縛を許す。

- (36)a. *自分₁の父親が太郎₁をその工場で働かせた。 (他動性使役文)
 b. 自分₁の母親の話が花子₁を喜ばせた。 (状態性EO心理述語文)
 c. 自分₁の父親の急病の知らせが誰も₁を病院へ走らせた。(状態性使役文)

また、(16)、(18)のFujimaki (2000)の観察で見たように、他動性使役文の作用域解釈は一義的であるが、状態性EO心理述語文では作用域解釈は一義的に決まらない。同様に、(37)のように、状態性使役文でも作用域解釈は一義的に決まらない。

- (37) 出世の願いかリストラの心配がどの人をも夜遅くまで働かせた。
 か>どの/どの>か

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

井上 (1976)はEO心理述語文の主語は対応するES心理述語文の感情を引き起こす原因となっていることを観察しているが、同様にAkatsuka (1977)は、EO心理述語は一般の他動詞とは異なり「(の)で」節との言い換えができることを観察している。EO心理述語同様、状態性使役文も「(の)で」節との言い換えが可能である。

- (38)a. 社長が社員を工場で働かせた。 (他動性使役文)
 b. *社長で社員が工場で働いた。
- (39)a. {その話/太郎が出世したこと}が花子を喜ばせた。 (EO心理述語文)
 b. {その話で/その話を聞いて/その話を聞いたので}花子が喜んだ。
- (40)a. {その知らせ/娘が入院したこと}が太郎を病院へ走らせた。(状態性使役文)
 b. {その知らせで/娘が入院したことを聞いたので}、太郎が病院へ(むかって)走った。

以上、逆行束縛、作用域解釈、「(の)で」節との言い換えの3点から、使役形態素「させ」がつくものは、(33a, b)の他動性使役、対、(34)のEO心理述語と(35a, b)の状態性使役の2つに分けられることが分かる。ではどのような述語文が状態性使役になれるのか。長谷川(私信)は、(35a)は「*病院へ走る」が不自然であるのに「病院へ走らせる」と言えることから、(35a, b)は「病院へ」「夜遅くまで」といった要素が補文の他動性を下げているのではないかと指摘している。⁷

状態性使役文とEO心理述語文の意味上の共通性として、2節でみた、「主語で表される出来事が目的語の経験者によって知覚されていなければならない」ということがある。この意味制約を、Akatsukaは逆行束縛を許す文の特徴として挙げている。⁸

井上 (1976)は、使役形態素「させ」のつく文として上記以外に次のような例を挙げている。⁹ (41)のように補文の主語が自力である状態を引き起こすと解釈できるものと、(42)(43)のように、主文の主語が補文のできごとの責任者として働くものである。

- (41) ゼリーを早く固まらせるには、冷蔵庫に入れるとよろしい。(井上1976:54)
 (42) 花子は冷蔵庫に入れるのを忘れて、卵を腐らせた。(井上1976:63)

言語科学研究第7号(2001年)

(43) 彼は子供を死なせた。 (井上1976: 65)

逆行束縛、作用域解釈のデータによると、これらはいずれも(33)の他動性使役文と同じグループとすることができる。

(44) 誰かがどのゼリーをも固まらせた。 だれか>どの/*どの>だれか

(45) 誰かがどのやさいをも腐らせた。 だれか>どの/*どの>だれか

(46)a. *自分の父親が花子を死なせた。

b. 誰かがどの学生をも死なせた。 だれか>どの/*どの>だれか

これらの使役文の共通性は、補文が出来事 (event)、主に自発的变化を表すという点である。

ここで、「させ」使役文をまとめる。¹⁰

(47)a. 太郎が花子{に/を}病院で働かせた。 (他動性使役文)

b. 太郎が野菜{*に/を}腐らせた。 (自発的变化使役文)

c. 花子の出世が太郎{*に/を}喜ばせた。 (状態性EO心理述語文)

d. その知らせが太郎{*に/を}病院へ走らせた。 (状態性使役文)

以上の4つは、逆行束縛、作用域解釈、「(の)で」節との言い換えによって、(47a, b)と(47c, d)の2つに分けられる。(47a, b)はともに補部に「花子が病院で働く」「野菜が腐る」といった出来事 (event) を選択している。¹¹ 一方、(47c, d)は主語に原因を取り、補部に人に関する状態を選択している。

4. 意味役割と統語構造

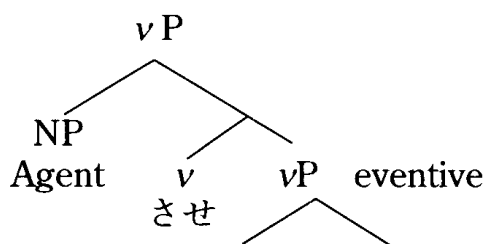
この節ではこれまでの考察を元に、他動性使役文、自発的变化使役文、ES心理述語文、EO心理述語文、状態性使役文の意味役割と構造の関係を考え、 θ 位置から θ 位置への移動の可能性を示唆する。

(48)は(47a, b)に相当する他動性使役文と自発的变化使役文の構造である。「させ」の補部 vP に他動性出来事 (agentive event) が来た場合の例が(47a)となり、補

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

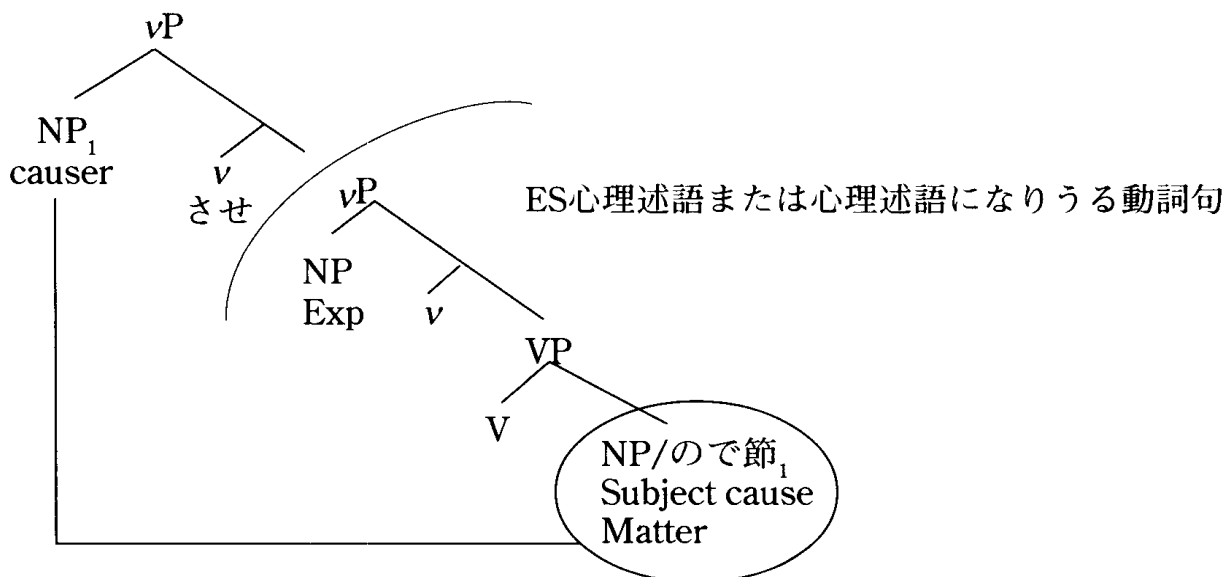
部vPに自発的変化の出来事が来た場合の例が(47b)である。どちらも、主文vPの外項の動作主と補文内の項の高さ関係は一義的にしか決まらないため、逆行束縛はできず作用域解釈も一義的であることが説明できる。他動性の解釈を持つEO心理述語文も(48)の構造となる。

(48) 他動性使役文/自発的変化使役文/他動性EO心理述語¹²



(49)は、(47c, d)に相当する構造である。下のvPのみがES心理述語の構造、上のvPまでを含めたものが状態性EO心理述語/状態性使役文の構造である。

(49) 状態性EO心理述語/状態性使役



3節で、EO心理述語文はES心理述語文との言い換えの他に「ので」節との言い換えができることをAkatsukaの例を引いて示したが、「*太郎が花子が出世したので花子が出世したことを喜んだ。」のように、感情の原因 (Cause)となる「ので」節と主題事柄 (Subject Matter)のNPは共起しない。ということは、原因の「ので」

言語科学研究第7号(2001年)

節と主題事柄のNPは統語位置上競合関係にあると言えるのではないか(渡辺明氏による指摘)。Akatsuka (1977)がES心理述語を「自動詞」であると考えているのも、主題事柄が必須項ではないゆえである。状態性EO心理述語文と状態性使役文において、逆行束縛が許され作用域解釈が二義的であるのも、補文のvの外項の経験者を挟んで上に原因(Causer)のNP、下に主題事柄のNPまたは原因(Cause)「ので」節という同一要素があるためである。(49)の構造は、Arad (1999)が保持しえなかった意味役割と統語関係を保持している。経験者はいつでもvPの外項として現れる。(49)では「させ」の指定部は原因という意味役割を担う位置である。仮に、補文のvP内からこの θ 位置である主文の主語への移動を考えるならば(Fujimaki 1998参照)、 θ 位置から θ 位置への移動という理論上の問題が生じる。しかし θ 位置への移動の可能性があるのは心理述語だけではなく、(50)の二次的述語文においても1つの項が2つの θ 位置を占めていると考えられるため、 θ 位置への移動という分析の可能性は残る。

- (50)a. John_i left the room t_i angry.
 b. John hammered the metal_i t_i flat.

この θ 位置への移動という分析の可能性、及びEO心理述語に使役形態素を内包しない言語においての(49)の構造の検証、また、井上(1976)が挙げている日本語の使役文についてのさらに詳しい統語的検討は今後の課題としたい。

注

* 本論文執筆にあたり、次の方々に有益なコメントを戴いた。長谷川信子氏、渡辺明氏、Tim Stowell氏、Alec Marantz氏、Lexicon Study Circleの由本陽子氏、西山圀雄氏、杉岡洋子氏、羽鳥百合子氏、伊藤たかね氏、神田外語大学の村山和人氏、高橋将一氏、山田昌史氏、江尾直子氏、上田由紀子氏、査読者の岩本遠億氏、木川行央氏。ここに謹んで感謝致します。

¹ EO心理述語の*frighten*などは、非対格動詞としてではなく普通の他動詞と同じような振る舞いをする。このことは、主語位置を非 θ 位置とし、非対格構文分析を取ったBelletti & Rizziの問題点としてPesetsky(1995)等によって指摘されている。

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

² Aradは分配形態論 (Distributed Morphology: Marantz 1997)の枠組みを採用し、語幹 (root: $\sqrt{\quad}$)に範疇主要部(categorical head)がついた構造を用いている。

³ (26)の主語を有生名詞とすると許容される文となる。

⁴ (27)は目的語を無生名詞とすれば許容される。*Jussi-sta*の*sta*は出格(relative case)であり、‘because of’のような意味を持つ。彼女はこの項は必須項ではなく付加詞であると後述する。

⁵ 例外的に、ES心理述語の「恐がる」は「太郎が花子(のこと)を恐がる。」のように有生名詞を目的語に取ることができる。

⁶ Stowell氏(私信)より、英語やイタリア語には「ES心理述語の目的語に有生名詞を取れない」というような制限がないので、そのような制限を持つ日本語(やフィンランド語)のデータを元に心理述語構造を想定することは問題ではないのかとの指摘を受けた。しかし、これは、心理述語の構造上の問題ではなく、[±人]という素性がどのくらい統語に敏感であるかが言語によって異なるという問題であろうと本稿では考える。例えば、英語では、“The key opened the door.”と言えるが、日本語では「*その鍵がドアを開けた」とは言えない。これは、英語では[+人]という素性を欠いた名詞句でも“open”の主語として拡張使用できるのに対し、日本語では[+人]という素性が「開ける」の主語には必ず必要だということであろう。同様に、日本語のES心理述語の目的語は、[+人]名詞句では「対象の命題内容」となれないのに対し、英語では[+人]名詞でも「対象の命題内容」に拡張できるということではないか。言語間で統語上、[±人]に対する感受性が異なることがこれらの違いに繋がっているのではないか。ここでの問題は、同じ言語内で、ES心理述語の目的語とEO心理述語の主語には共通の意味的制限があるということである。

⁷ 状態性使役文として、(i)のような他動詞補文はどうだろうか。

(i) 母親の思いやりが息子に困難な仕事をやりとげさせた。(井上1976:63)

井上(1976)はこのような文を「翻訳調のむしろ不自然な日本語として受け取られる(p. 63)」としている。しかしながら、(i)が許容できる話者には、(i)のような他動詞文も逆行束縛ができ、作用域解釈が二義的になり、「(の)で」節との言い換えもできる。従って、どのような意味条件がこれらの構文を許すのかにはさらなる考察が必要であるが、状態性使役文は他動性使役文とは異なる振る舞いをするということが言えるであろう。

⁸ Akatsuka(1977)は、逆行束縛を許す文の例として、黒田(私信：1971)の(i)のような例を挙げ、これらの分析のためにはLexical decompositionが必要であるとしている。

(i)メアリーが自分₁を非難したことがジョン₁を打ちのめした。(Akatsuka 1977:97)

日本語において「させ」を含まない述語がEO心理述語的解釈を持ち、逆行束縛を許すということは、元々EO心理述語に使役形態素を含まない英語やイタリア語との共通した分析の手がかりとなるのではないか。今後の課題としたい。

⁹ 日本語の使役文の種類に関しては井上(1976:66)に詳細にまとめられている。

¹⁰ 目的語(補文の主語)の格については、井上(1976)を参照されたい。

言語科学研究第7号(2001年)

¹¹ (47a, b)がともにevent vPの補部を取ると考えれば(47c, d)との違いを説明できるのではないかとの指摘を渡辺明氏より受けた。

¹² 本稿の議論とは関係がないので、便宜上主要部(head)はすべて左側においた。

¹³ 二次的述語文における θ 位置への移動は渡辺明氏がその可能性を考察している。

¹⁴ 長谷川(2000)はEO心理述語構文として、独自に(49)同様、causeの項が補文内から移動する分析を提案しているが、本稿の分析とは異なり、「させ」の指定部は空である。

参考文献

- Akatsuka, Noriko McCawley. 1976. Reflexivization: A transformational approach. In *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, ed. Shibatani, Masayoshi, 51-116. New York: Academic Press.
- Arad, Maya. 1999. On "little v." In *Papers on Morphology and Syntax Cycle One (MIT Working Papers in Linguistics 33)*: 1-25. MIT.
- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi. 1988. Psych verbs and theta theory. *Natural Language and Linguistics Theory* 6: 291-352.
- Fujimaki, Kazuma. 1998. A note on causatives and passives with psych-predicates in Japanese: Evidence for movement into a theta-position. 『神田外語大学紀要 言語科学研究』4: 93-107. 神田外語大学大学院
- Fujimaki, Kazuma. 2000. 「心理述語文におけるスコープについて」第120回日本言語学会大会予稿集 251-256.
- Hasegawa, Nobuko. 2000. Causatives and the role of v: Agent, Causer, and Experiencer. 口頭発表. 神田外語大学COE国際シンポジウム『先端的言語理論の構築とその多角的な実証』(課題番号08E1001)神田外語大学12月9日.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The View from Building 20*, ed. Hale, Ken and Samuel Jay Keyser, 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 井上和子1976『変形文法と日本語(上)』大修館
- 金河守1994「日本語の形式名詞『こと』の機能 — 目的格の名詞句に出現する形式名詞『こと』を中心に—」『言語論叢』13:1-11. 筑波大学
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15号 [金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』1976 むぎ書房に再録]
- Kuroda, S.-Y. 1965. Causative forms in Japanese. *Foundations of Language* 1: 30-50.
- Lee, Gregory. 1971. Notes in defense of case grammar. In *Papers from the 17th Regional Meeting of the Chicago Linguistic society*, ed. D. Adams et al., 174-180. Chicago: University of

心理述語と使役構文：意味役割と統語構造について

Chicago Department of Linguistics.

- Marantz, Alec. 1997. No escape from syntax: Don't try morphological analysis in the privacy of your own lexicon. In *Upenn Working Papers in Linguistics*, ed. Dimitriadis, L. Siegel et al., 201-225. University of Pennsylvania.
- Pesetsky, David. 1995. *Zero Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pylkkänen, Liina. 1999. On stativity and causation. In *Events as Grammatical Objects: The Converging Perspectives of Lexical Semantics, Logical Semantics and Syntax*, ed. Tenny, Carol and James Pustejovsky. CSLI, Stanford, CA.
- Vendler, Zeno. 1967. Verbs and times. In *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.